



ツルの地元という宿命

理事長 百瀬邦和

巻頭言	・・・1
3度目のINSへ	・・・2
中国のツル類 渡り中継地の調査 に参加して	・・・3
中標津のニオ作り	・・・5
BelayaとRus	・・・5
調査結果報告	・・・6
保護収容した タンチョウ幼鳥の 両跗蹠に見られた 骨格異常について	・・・6
トピックス	・・・8
<活動記録>	・・・8

先日鶴居村で開催されたシンポジウムでは、地元の小学生から出た「村に住んでいる宿命」という言葉が話題になりました。このシンポジウムは鶴居村の開村80周年記念を兼ねたものでした。村の名前を「鶴居村」と決め、上級の役所の届けた際に「ツルがいなくなったらどうするのか」と言われたという逸話を聞いたことがあります。

80年を経た今、鶴居村からツルが居なくなる心配はなくなりましたが、今度はそのにいるツルと正面から向き合っていかなければならない「宿命」を抱えています。

鶴居村に限らず、タンチョウが普通にいるようになった十勝・釧路・根室地方も同様の現実を抱えているわけです。タンチョウを観に、撮りに、そして「保護」現場の視察に、国内外から大勢の人がやってきます。彼らとどう接するのか、何を見せるのか。それを意識しなければならないのも、世界の希少種の地元で生活している私たちみんなの宿命といえるのではないのでしょうか。

日本と並んでツル類の生息地である中国や韓国でも、個体数の減少、限られた地域への集中、土地や水をめぐっての農業との軋轢など、同様の問題を抱え始めています。問題が先行している日本は、その先を示していかなければならない「宿命」を抱えていると言えるでしょう。人間と深く関わって生きている希少種の保護に当たっては、住民が「折り合いをつけて一緒に暮らしていくこと」を意識して具体的に行動していくことが望ましい姿ではないかと考えます。

日本野鳥の会、タンチョウコミュニティ、むかわ町のタンチョウ見守り隊、長沼町のタンチョウを呼び戻す会、そして当法人の活動は、地元としてタンチョウに向き合う姿勢の意思表示とみなすことができるでしょう。そして、今回のシンポジウム開催を機に地元としての行動を開始した鶴居村の動きには大いに期待しています。

3度目のINS(国際ネイチャースクール)へ

高田 令子

今年も中国で行われたINSに参加してきました(8月25日～9月4日)。これで3度目の参加となります。今年のINSの開催地は、遼寧省の獮子洞(ホアンジドン)自然保護区と内モンゴル自治区の科爾沁(カーチン)自然保護区の2か所。昨年と全く同じです。そして、東北林業大学の学生達も、半数以上が顔馴染み。初参加の時のような不安を全く感じることなく、昨年以上に積極的なサポートが出来たように思います。

授業は、湿地、植物、鳥、芸術(主にお絵かき)の4つのテーマで行います。各授業内容は、これまでとほぼ同じですが、細かな修正が加えられており、年々その完成度が高まっているように感じました。3年前、私と同じく初参加だった学生が、今回はリーダーとして後輩を率いる姿がとても頼もしく感動しました。



獮子洞での授業風景(湿地班)



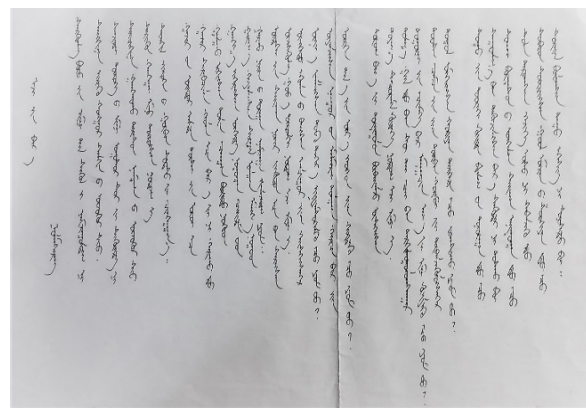
科爾沁での授業風景(植物班)

内モンゴル自治区の科爾沁では、ネイチャースクールの授業以外に、夜の特別授業が行われました。ネイチャースクールに参加した中学生達から我々外国人や大学生達ともっと交流したいという要望があり、最終日の夜に急遽

予定が組まれました。9クラスある3年生の教室を手分けして数クラスずつ訪問しました。英語での質疑応答や、黒板でのお絵かき対決、モンゴル語での詩の朗読や歌の披露など、クラスによって交流内容は様々でしたが、内モンゴルの中学生と有意義な時間を過ごすことができました。彼らとは、帰国後もQQ(チャット形式の中国版メールアプリ)を介しての交流を続けています。彼らは、日本の文化や環境、生活、我々の活動内容などについていろいろと質問してくれます。異国について知ることは自国を知ること。「国際」と銘打つINSの真髓が、子供達に確実に浸透していると感じています。



夜の特別授業にて(科爾沁)



科爾沁の自然について書かれた詩

INSでは、湿地環境の保全が大きなテーマです。獮子洞や科爾沁の湿原は、ソデグロヅルの重要な越冬地です。湿地環境の保全の象徴として、ソデグロヅルは必ず授業で紹介される鳥です。でも、授業が行われる季節は晩夏。毎回、ソデグロヅルの生息地を訪れているのに、その姿を見られないことが残念でしたが、今回は幸運にも5羽のソデグロヅルを

見ることができました。

霧で霞む広大な湿原の遙か彼方に見えた5つの白い点がソデグロヅルでした。今頃は、この湿原に数百羽のソデグロヅルが飛来していることでしょう。

INSを経験した学生の中には、その後、ICF(国際ツル財団)の研究者として、北京や内モンゴルの自然保護

区でツル類の保全活動に携わっている人がいます。

INSの活動は、広い中国の中では小さな活動に過ぎないかもしれませんが、でも、INSを経験した学生達が、将来、研究者として、行政の一員として、教師として、様々な分野でその重要性を広めてくれることと期待しています。



遙か遠くの白い点が5羽のソデグロヅル

中国のツル類渡り中継地の調査に参加して

百瀬 邦和

10月15日から25日まで、ICF中国のSu Liying博士が行っているツル類の渡り中継地における調査に参加しました。今回は北京から北に向かって河北省の北部から内モンゴル自治区に点在する湿原の調査です。前半は中国科学アカデミーのYifei博士の運転するJeepに北京林業大学のWu君も同乗しての調査行で、スケジュールの中には中学校と大学での講演会も含まれていました。錫林浩特(Xilinhaote)市の中学校では280人の生徒を、また、大学では200人の学生を対象に、マナヅルの生態を研究しているYifei博士とYu君、そしてSu博士が、それぞれ1時間半のレクチャーを行いました。



中学校で話すSu博士



錫林浩特(Xilinhaote)市近郊の湿原に
塹をとるマナヅル

私の役目は冒頭での日本語による挨拶でした。なぜ遠い日本からやって来たのか。つまるところ、当地に生息するツル類のおかれている国際的な意味を訴えるのが目的なのです。この講演会を準備したのは地元NGOのAIE(モンゴル語ではアエイと発音し、ABCつまり最初からという意味だそうです)で、自然環境の保護ばかりではなく音楽などの芸術分野を含めて幅広く活動している活発な団体だそうです。団体のテーマソングまであり、会場ではプロの歌手であるメンバーの歌を流していました。中国としては片田舎の町(ただしこの大学には学生だけで2万人もいますが)にこんなに活発なNGOがあるのに感心しました。また、同市では地元テレビ局とAIEからのインタビューも

受けました。

この市では警察署長さんが鳥類の保護に熱心な方で、パトカーの先導で大平原の中を2時間近く走り、緩やかな丘に囲まれた広い湿原に案内してくださいました。

日本では数の少ないハイイロガンの群れが採餌しているところに2羽のマナヅルが舞い降りるのが見え、さらに一番いのタンチョウとクロヅルも見ることができました。

のメダルや記念写真、そして大きな馬の絵が飾ってありました。メインはもちろん当地のご馳走の羊の骨付肉です。薄い塩味の水煮で、私がこれまで食べた中では一番美味しかったのですが、それを表現するだけの文才がないのが歯がゆいところです。なんでも干し方にコツがあるそうで、ある程度細く裂いて表面だけ乾燥させるということでした。

最西端繁殖地にいたタンチョウ



根室から約2400km西のタンチョウの最西端繁殖地



ここは北京のバードウォッチンググループの情報をもとにSu博士が最近確認したタンチョウの新しい繁殖地で、タンチョウの分布域の中では最西端になります。GPSによれば標高は1000メートルを超えていましたので、標高の点でも最も高い記録になるでしょう。Su博士の話ではこの地域にはもう一番いが繁殖しているということでしたが、残念ながらそちらを回る時間はありませんでした。

内モンゴルの大平原では、かつての遊牧民が、今も牛や羊、そして馬、時にはラクダを放牧して生活しています。しかし、彼らの伝統的な住居であるゲルはほとんど見られませんでした。政府の定住化政策により、家畜のための草を求めて移動する必要がなくなった(あるいはできなくなった)のでしょう。人々は普通の家に住んで家の周りで家畜を放牧しています。家畜が遠くに行ってしまうないように放牧地が柵で囲われています。

雨の量が少ない半砂漠で草の育ちが悪いため、一軒あたりの放牧地の区画はとてつもない広さです。一本の木もない平らな土地に切れ目なく柵が張られている光景に、不自然な印象をうけました。道路は両側に張られた柵の間を縫うように延々と伸びています。不安な思いを裏付けるように、私たちが滞在している間に、希少種であるノガンがこの柵に絡んで翼を折り保護された、というニュースが飛び込んできました。このような柵は、ノガンに限らず、この地域に生息している野生生物に大きな影響を及ぼしていることでしょう。

牧場の一軒で昼食をご馳走になる機会がありました。部屋の中にはナーダム(夏の祭典)に出場した時の沢山

モンゴルでは、より乾燥して草の成長が悪い西に行く程、羊は草を食べるのに苦勞するので肉は美味しくなるという話も聞きました。さすがは肉が主食の遊牧民の文化だと思いました。

錫林浩特市から科爾沁(Kerqin)の通遼(Tongliao)市へは夜行寝台での移動でした。列車の車両は30年前に私が初めて中国に行った際に乗ったのと同じ3段ベッドタイプの古いもので、懐かしい思いがしました。このあたりはカーチン砂漠と呼ばれ、大興安嶺の南麓から東に向かって筋状の砂丘が連なり、南北200km、東西100km以上の巨大な風紋地形になっています。砂丘の幅は3~5km、高さは10m程度で、砂丘の間にはそれより狭い低地があり、その低地の一部が浅い沼になっています。これらの沼を伴った湿原はソデグロヅルの中継地として注目されていて、ICF中国のスタッフである呉慶明(Guo Zhiwei)君が3週間前から現地のフィールドステーションに住み込んで調査をしていました。

今回は彼と一部地域を一緒に回りました。私たちはソデグロヅルを延べ345羽数えましたが、このうち確認できた幼鳥は9羽だけでした。別の場所からの報告でも幼鳥が少なく、500羽以上数えた中で幼鳥は3羽だけだったとのこと。繁殖地で何があったのでしょうか。今年だけの異常であれば良いのですが。

カーチン砂漠に点在する大小の湿原は数え切れ

ないくらいあり、渡りの中継地として滞在するソデグロヅルは、安全で餌の豊富な場所を求めて時に滞在地を移動するため、個体数を調査するだけでも大変なの言うまでもありません。そんな中で、Su博士のグループは、ソデグロヅルにとって主要な湿地の餌環境を調べるための植生調査を行っています。こうした調査には、呉君のようなINS

の出身者が参加しています。

今回の内モンゴルでの一週間は、現地の地形や自然環境、そしてそこに住んでいる人たちの様子を垣間見ることができた楽しい経験でした。特に大自然の中で観たツルの群れはとても野性味に満ち、綺麗で、彼らの魅力を改めて感じることができました。

中標津のニオ作り

百瀬 邦和

今年の俵橋湿原のデントコーン畑は豊作でした。昨年同様に隣接の中林さんに耕起して頂いた後、これまで以上に畝を高くし、さらに初めてプラスチックシートでマルチをしました。雑草の成長を防ぐのと、芽生え前後の地温を上げる効果を期待しての作業です。今年は初めて私たちの畑がツルの食害にあい、芽生え期に土中に残っている種を掘り出して食べられました。これは私たちが行っている畑づくりの目的としては良い傾向と考えるべきでしょう。この畑のトウモロコシはツルの餌として耕作している畑ですし、この時期に私たちの畑にツルがいてくれることで

二つ目のニオ(矢印)と刈り残して下さったトウモロコシ



畑に作った新しいニオ 後方は刈り残したトウモロコシ

農家の畑の食害を減らせますから。種を再度撒き直し、今度は防鳥ネットをかけました。夏の間、中標津在住の大河原さんが成長具合のチェックや草取り、プラスチックマルチの管理等を熱心してくれました。天候もまずまずだったので、トウモロコシは立派に成長し、初めて自前の畑で採れたトウモロコシだけでニオ2基を完成させ、さらに雪に埋もれてしまうまでの餌として1アールほどの実がついたトウモロコシを残すことができました。嬉しいことに、毎年畑にニオを作らせていただいている農家の方がニオ予定地の近くに、ツルのためのトウモロコシを刈り残しておいて下さいました。この冬のツルの様子が楽しみです。

BelayaとRus

国後島で標識されたタンチョウに名前がつけました（事務局）

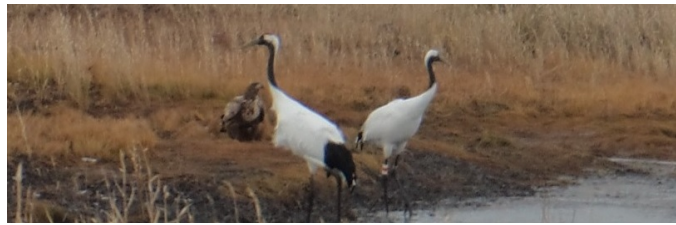
Tancho 31号で、クリル国家自然保護区と共同で行われた標識調査により2羽のタンチョウに発信器とカラーリングとが装着されたとお知らせしましたが、その2羽に名前がつけました。Belaya(ベラヤ)とRus(ルス)です。

Belayaは9月2日に国後島から北海道の別海に番いで渡ってきました。その後、10月16日に一旦国後島の営巣地に戻りましたが、11月7日には、再び別海に飛んできました。そして、11月27日に標茶に移動しました。



Belaya 2017年9月9日 別海にて森竹 祐氏撮影

Rusは装着後に元気な姿が繁殖地で確認されていますが、今の所、発信器による情報は受信されていません。



Belaya 2017年10月31日 国後島にて

(右写真は、クリル国家自然保護区 学術調査
研究担当副所長エフケ `ニー・コス `ロフスキー氏撮影)

調査結果のご報告

* 2016年度カウント調査

2016年度(2016-2017年の冬)のカウント調査結果が出ました。

今年(2017年)1月28日から2月7日にかけて行った、タンチョウの総数カウント調査の集計結果を報告します。総数は1750羽、うち幼鳥は206羽となりました。これは各調査地の班長が集計した数を合計し、さらに調査後に確認された標識鳥を用いて補正し算出しました。

総数は、例年の通り50羽刻みの概数です。

* 2017年タンチョウ標識調査

2017年のタンチョウ標識調査を無事終了しました。2017年の標識調査では、24羽(オス11羽、メス13羽)のタンチョウのヒナに標識が付きました。例年になく暑さとの戦いの調査でしたが、調査に参加して下さったボランティアの皆様、本当にありがとうございました。

今年は、道央圏で初めて標識を付けることが出来ました。地元で昨年3月に結成された「むかわタンチョウ見守り隊」の方々と、見守り隊とともに活動を進めてきた日本野鳥の会の原田レンジャーにご協力を戴き、標識調査を実施することが出来ました。

調査後に見守り隊の方から、調査への感想、そしてお礼と感謝のとても丁寧なメールが届きました。「この日が来ないようにと思う気持ちもあった」という言葉の後に、

「(タンチョウの)バンディングはとてもアクティブなイメージでしたが、実はとても慎重でナイーブなのだと知りました。静かで一人一人が真剣でした。」という言葉をいただきました。タンチョウのバンディングに際して私たちが常に心がけていることを解っていただき、とても嬉しく思いました。

そしてもう一つ、報告があります。1988年にタンチョウの標識調査を開始してから、30年目にあたる2017年の調査最終日に通算で500羽目のヒナに標識が付きました。ここまでこられたのも、毎年、標識調査に参加して下さるボランティアの皆様のおかげです。

これからも、どうぞよろしくお願いたします。



今年標識をつけた幼鳥(むかわタンチョウ見守り隊 提供)

保護収容されたタンチョウ幼鳥の両跗蹠に見られた骨格異常について 渡辺有希子、小笠原浩平、齊藤慶輔(猛禽類医学研究所)

環境省釧路湿原野生生物保護センターに保護収容されたタンチョウ(幼鳥 オス *剖検時の生殖腺の確認による)の左右の跗蹠に変形を認めた事例について報告します。

【保護の経緯】

2017年9月13日夕方に別海町の牧場の牛舎裏の草地にて、タンチョウ幼鳥が飼犬に追いかけられ草むらに逃げ込み、草に絡まったまま動かないと牧場主から釧路自然環境事務所に連絡があった。牧場主が草むらから救出したが、跛行を示し、容易に捕まったとのことであった。

9月14日、釧路湿原野生生物保護センターに収容した。

後日、牧場主からの聞き取りでは、敷地内になわばりを形成しているつがいの幼鳥と思われ、兄弟の姿は確認していないとのことであった。



図1 個体外貌

【検査結果】

1. 外貌

個体は重度の削瘦(体重4300g)、全身に多数のハジラミの寄生を認めた。

右跗蹠関節(足根間関節)の腫脹、左跗蹠骨(中足骨)の弯曲、左足指の変形および外反を認める。起立は可能であるが、左足の重度変形により、負重は右足が主体である。歩行時は両足を使うも、右足は挙上時に大きく外転しながら踏みだし、左足への負重も傾きながらバランスを取り、混合跛行を認めた。



図2 右跗蹠関節の腫脹



図3 左跗蹠骨の変形

2. レントゲン検査

右側の跗蹠骨近位端内側に過去に生じた骨折の不正癒合を認めた(図4: 矢印)。左側跗蹠骨に弯曲と骨の捻転を認めた(図4: 線括弧内)。

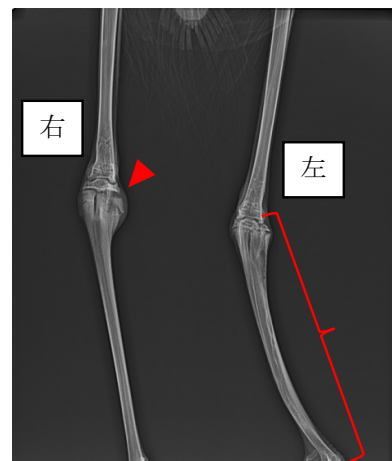


図4 レントゲン検査で認めた右跗蹠骨の不正癒合および左跗蹠骨の変形

【まとめ】

本個体に見られた跗蹠骨の異常は、成長期に病的な骨折が生じたことにより、不正癒合および変形したことが考えられた。例えばカルシウム欠乏等の重度の代謝性骨疾患の場合は、複数箇所での病的な骨折または骨の弯曲が生じることが予想され、本個体には該当しないように思えた。また大型で長脚の早成鳥類においては、代謝性骨疾患に起因する物以外に、脛骨や足骨、あるいは翼の骨格に捻れまたは弯曲などの中変形が若鳥の成長時に報告されている。その原因として遺伝的要因、栄養的要因、環境要因などが示唆されているが、詳しくは解っていない。しかし本個体の場合、左右別々に骨異常を示していることから、やはり外傷性の要因により骨折が生じ、右跗蹠骨に不正癒合、左跗蹠骨の成長板の片側に成長の遅延が生じて屈曲が生じたと推察する。

本個体は、親への合流を目指し、9月20日、22日に保護収容地にて放鳥を試みましたが、親が出現せず断念した。周辺の牧草地にて堆肥散布が行われており、親の行動パターンに変化が見られた影響が大きかったことが考えられる。その後も釧路湿原野生生物保護センターにて収容していたが、10月8日に起立不能となり、10月9日に死亡を確認した。

(編集部より: 野外のタンチョウの骨格異常が確認され専門医に診断を受けた例は、非常にめずらしいので、治療に当たった獣医師の渡邊さん他に報告していただきました。)

<活動記録> (2017年7月～11月)

- | | | | |
|--------|---------------------------------------|--------|---|
| 7月31日 | 会報Tancho 31号送付 | 10月30日 | 俵橋湿原ほかでニオ作り
(5名参加、雨のため現地で中止し11月2日に延期) |
| 8月 4日 | 運営会議 (8名出席) | 10月31日 | 宮城県丸森町に出張 (百瀬)
～11月 1日 |
| 8月 6日 | 上智大学学生に釧路湿原のタンチョウ生息地
を案内 (百瀬) | 11月 6日 | TKG News 63号送付 |
| 8月 7日 | タンチョウ保護増殖検討会に出席 (百瀬) | 11月10日 | 根室振興局農村振興課と農業農村整備事業
の件で協議 (百瀬)
運営会議 (6名出席) |
| 8月24日 | 中国のINSに参加 (百瀬・高田令子)
～9月 5日 | 11月15日 | 神戸市シルバーカレッジサークル「Good Days」で講演
(於: 兵庫県 神戸市勤労会館 山根みどり) |
| 9月15日 | 運営会議 (7名出席) | 11月22日 | 釧路湿原自然再生協議会 第22回土砂流入
小委員会に出席 (百瀬) |
| 9月18日 | 旭山動物園くらぶの活動発表会で発表
(於: 旭川市旭山動物園 百瀬) | 11月23日 | 鶴公園タンチョウ講座にて講演
(於釧路市丹頂鶴自然公園 住吉 尚) |
| 9月30日 | 松木護氏 退職 | 11月24日 | 道東臨床検査技師会で講演
(於: ANAクラウンプラザホテル釧路 武田浩平) |
| 10月 6日 | 運営会議 (6名出席) | | |
| 10月15日 | 中国の内モンゴル自治区に出張 (百瀬)
～25日 | | |

<トピックス> 「クリル国家自然保護区からのニュースです」 (事務局)

クリル国家自然保護区学術調査研究担当副所長のエフケゲニー・コズロフスキー氏が北方四島におけるタンチョウの繁殖状況をお知らせくださいました。

2017年は国後島で5番い、また、水晶島、勇留島、志発島、多楽島では、各々1番いづつの繁殖番いが確認されたそうです。多楽島で繁殖が確認されたのは初めてです。



9月に多楽島で撮影 提供: クリル国家自然保護区

<会員 (11月23日現在)>

会員数: 187名 (運営会員: 27名、個人サポート会員: 143名、団体サポート会員: 17団体)

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Thirty-second issue November 2017

<表紙写真>

俵橋湿原で中標津町の方々と一緒に
行っているニオ作り作業

特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>